

研究紀要 8 6 障害等のある子の教育への臨床教育学的視点からのアプローチ

東 昭志（青山町立阿保小学校） 中西 由美子（多気町松阪市学校組合立多気中学校）
静永 かや乃（津市立白塚小学校） 石倉 裕晃（県立緑ヶ丘養護学校）
無藤 賢治（三重県総合教育センター） 藤井 郁子（三重県総合教育センター）

1 研究の趣旨

2002 年の新学習指導要領の施行を前に、教育現場での問題は年々多様化と深刻化を増し、一刻も早い対応を迫られている。しかし従来の教育理念や教育方法では最早対処できにくい状況にある。これまでの教育研究の主眼に置かれていたものは、個より集団を対象とした指導方法や指導内容の検討、学習理解のための能率的、効率的な方法の追求であった。しかし本来子どもは個というユニークな存在であり、人間の心理には意識されない深層がある。これまでも個性の尊重が叫ばれ、個を対象にした取り組みがされてきたが、この個全体にかかわった具体的、個別的、実践的な教育の方法を追求していかなければならないときが来ている。

そこで本研究では臨床教育学的視点に立った教育研究を試みることによって、教育の意味と価値について再考し、教育現場で必要な取り組みを提示した。

2 研究の内容

(1) 臨床教育学的視点に立ち、次の手順で研究を進めた。まず教師が現象の客観的観察者ではなくその現象の中に自分を入れて語るということを試みた。そしてその語りが多面的、多重的、多声的であるため、視点の移動を試みることによって多様な意味を探っていった。さらに教師と子どもとの間にある関係 - もの・こと・人 - についての丁寧な記述をしていった。そして、それぞれの実践事例を持ち寄り検討を重ね、次の実践につなげていった。また、日々教育学や心理学等の文献にあたりながら、子ども理解や子どもとのかかわりの参考にしていくことに心がけた。研究事例についての概略は以下の通りである。

(2) 研究事例について

【事例 1】 「ジャイアンチンチン物語」

教師が子どもの背景を多面的にとらえることで、人とのかかわりの中でことばが象徴化され獲得されていく過程のドラマが描き出された。

【事例 2】 「旅立ち自転車に乗って」

なかなか集団になじめない子どもにひたすら寄り添い、子どもと同じ視点で周りを見ることを通して、それまでの教師の集団観にさらに深い意味づけをしていく過程が述べられた。

【事例 3】 「ベースキャンプ作り」

教師が心の視線を送り続け、子ども心の声を聞くことで、子どもが安心の基地を教師の足下に獲得していく過程が述べられた。

【事例 4】 「智恵ちゃんから切って」

死の 2 週間前まで続けた電話での智恵とのつながりから、死に逝く人の傍らに居続けることの意味について考えた。

3 研究のまとめ

研究を通して主体的に生きる子どもの姿を語る事ができた。教師が自分との関係性で子どもを語り始めることができたと感じたとき、子どもは著者としての声を持ち自分の物語を語り始める。現象のかかわり手としての自分に気がついた教師は、子どもとの関係に謙虚で、子どもへの尊厳の気持ちを持ち、さらに教師自身への生き方を問い始める。教育とはその子どもが主体的に生きながら人格を豊かにしていくことへの支援なのであろう。